

# 第3章 子どものしつけ・教育観

## 第1節 子育ての場面

## 第2節 子育てで心がけていること

## 第3節 家庭の教育方針

聖徳大学教授 木村 敬子



## 第1節 子育ての場面

母親にとって、その日のできごとや友だち・先生についての話を聞きながら過ごす子育ての時間は、多忙ななかの貴重な瞬間にちがいない。減少し続けていた「子どもが成長したと感じる」が増加に転じた。子育ての充実感が戻ってきたといえるのだろうか。

前回の調査が行われた2007年は大きな変わり目の時期であった。2006年12月に公布・施行された改正教育基本法によって家庭教育の条項が新設されたことに示されるように、家庭教育について数々の提言や施策の展開がみられていた。「早寝・早起き・朝ごはん」といった“望ましい生活習慣”を身につけさせようという運動など、家庭のしつけや教育の内容に社会や国・行政の関心が強まっていた時期であった。2007年の調査ではそうした社会を背景として、子育てに熱心な母親のようすが読み取れていた。5年後の現在も、文部科学省が家庭教育支援の推進に関する検討委員会を設置し(2011年5月)、家庭教育支援ホームページを設けるなどの動きが続き、子育て中の母親は家庭教育支援の強化という状況に取り囲われている。その流れはどう母親の回答にあらわれるだろうか。

### 1. 日ごろの生活場面：

#### 会話によるコミュニケーション

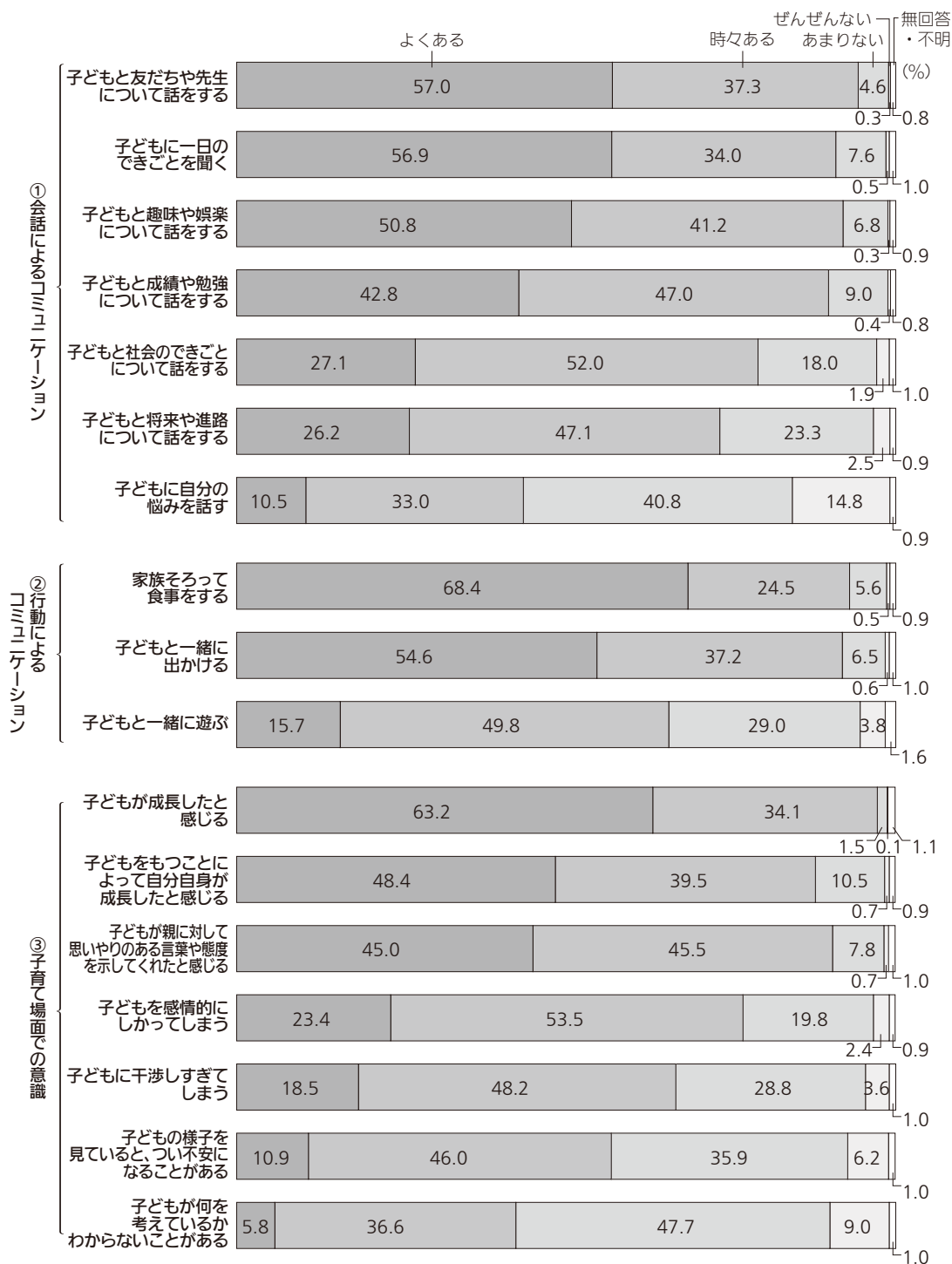
図3-1-1は子育ての場面についての質問への、小1～中3生の母親全体の回答結果である。日ごろ、「子どもに一日のできごとを聞く」ことを契機にコミュニケーションを図るのはこの年頃の子育ての基本といえるが、とくに小学校低学年時代には多くの母親がこれを行っている。しかし、中3生の母親も43.7%が「よくある」と答えて

いる(図3-1-2)。その中身として登場するのが「友だちや先生の話」というのは自然な流れのようである。今回新設の項目「子どもと趣味や娯楽について話をする」も全体でみて3番目に多かった(図3-1-1①)。どの学年でも毎日の会話の定番は、友だちや先生の話、その日のできごと、趣味・娯楽であることがわかる。次に「子どもと成績や勉強について話をする」が続く。

学年段階別に「よくある」の比率を示したものが図3-1-2である。成績や勉強の話は中3生になるととくに多くなるのは無理のないことと思うが、今回の特徴は小学校低学年の母親でも36.3%が「よくある」と答えていることである(前回は30.5%)。そこで学力観(問17)の結果と照らし合わせてみると、学力観の変化と呼応していることがわかった。小学校低学年の母親の54.9%が「子どもの学習上の苦手は親として正確に知っておきたい」(問17-8)と答えている。これは前回(50.9%)と比べても多い。さらに低学年の場合、「今は勉強することが一番大切だ」(問17-5)が前回の13.9%から20.9%へ、「いい学校に入れるには塾に通わせる必要がある」(問17-7)が前回19.0%から今回は21.9%へと変化している。小学校低学年から早くも勉強や成績への関心が高くなり、それが、日ごろの会話内容の変化に如実にあらわれていることがわかった。

今回のデータ内で低学年の母親にしぼっ

図3-1-1 子育ての場面



注) サンプル数は7,519人。

て、「子どもと成績や勉強について話をする」かどうかと、学力観の関連をみると、成績や勉強の話をするのが「よくある」母親ほど「子どもの学習上の苦手は親として知っておきたい」と思い、「今は勉強することが一番大切だ」と思い、「いい学校に入れるには塾に通わせる必要がある」と思っていることが統計的検定によっても確認された。家庭教育で母親たちは勉強や成績の話にそれほど比重をおいているのか、基本的な生活習慣などのしつけとのかねあいはどうなのか、ということについては次節「子育てで心がけていること」で取り上げる。

.....  
**2. 子育ての場面で感じること**  
 .....

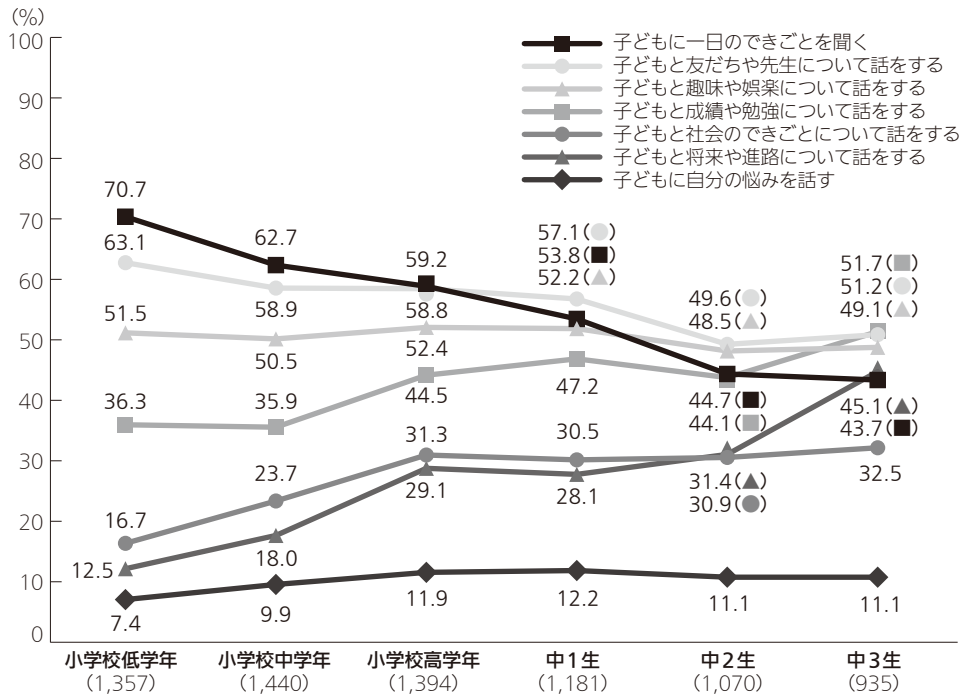
図3-1-1③は、母親が子育て場面で感じることをたずねた結果の小1生から中3生までの全体値である。「子どもが成長したと感じる」「子どもをもつことによって自分自身が成長したと感じる」、そして「子どもが親に対して思いやりのある言葉や態度を示してくれたと感じる」という3項目は今回も前回と同じ順位で上位を占めた。しかも上位2つは子どもの学年段階による違いは小さく、多くの母親が子どもと自分の成長を実感できていることが今回の結果でも示された(図3-1-3)。学年段階による違いがみえるのは「子どもが親に対して思いやりのある言葉や態度を示してくれたと感じる」と「子どもを感情的にしかってしまう」の2つである。いずれも学年があがるにつれて減少していくことが前回と同様に示されている。今回新設した2項目「子どもの様子を見ていると、つい不安になる

ことがある」「子どもが何を考えているかわからないことがある」の肯定的な回答はどの学年段階でも少なかった。

.....  
**3. 経年変化について**  
 .....

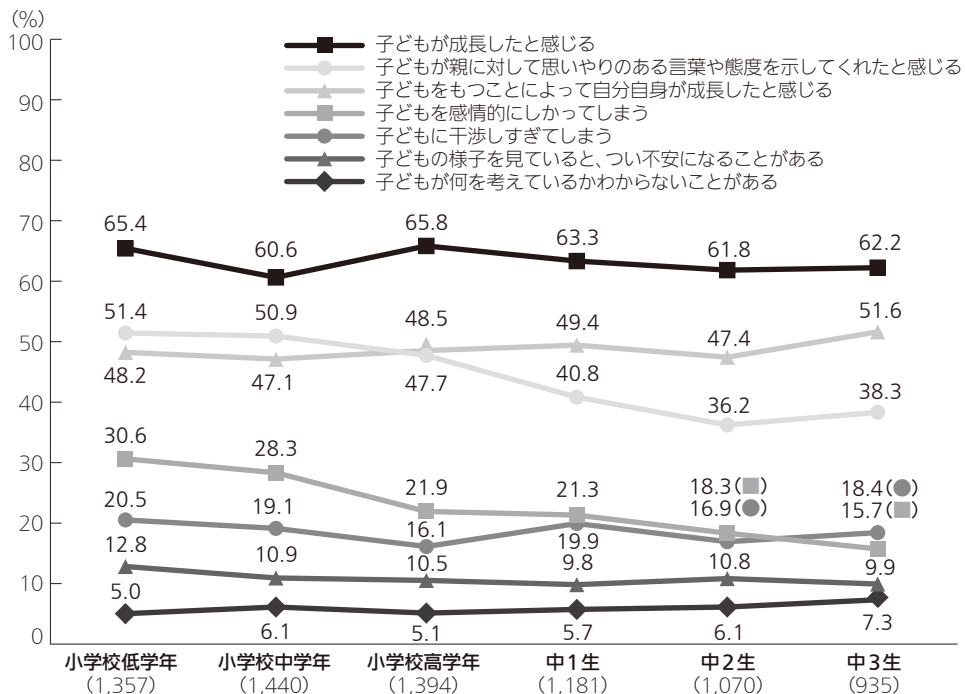
子どもが、あるいは自分が成長したという項目、さらには思いやりのある言葉や態度を示してくれたと感じる、という項目については、前回2007年の調査ではそれを肯定する母親が減少したので注目していた。ここで今回の結果を確認してみよう。「子どもが成長したと感じる」ことが「よくある」母親は2002年64.5%だったのが2007年に57.1%へ減少し、しかもどの学年段階でも一様に減少していた。つまり子育ての充実感とつながる子どもの成長を実感する母親が減っていたのであった。では今回は、とみると、結果は「よくある」は63.2%で(図3-1-1③)、増加に転じたといえそうである。図3-1-4は前述の結果を学年段階別に詳しくみたものである。この図に示される平均値とは、「よくある」に4点、「時々ある」に3点、「あまりない」に2点、「ぜんぜんない」に1点を与えて平均値を算出したものである。点数が高いほど成長したと感じていることになる。1998年は小学校低学年を調査対象としていなかったのが抜けているが、その他は過去3回と比較できる。どの学年段階でも2007年より上昇している。今回の母親たちの子育て場面で感じる意識は好転しているといえるようである。また、図3-1-5、図3-1-6も同様に平均値を算出して経年変化をみた結果である。

図3-1-2 子育ての場面 会話によるコミュニケーション（学年段階別）



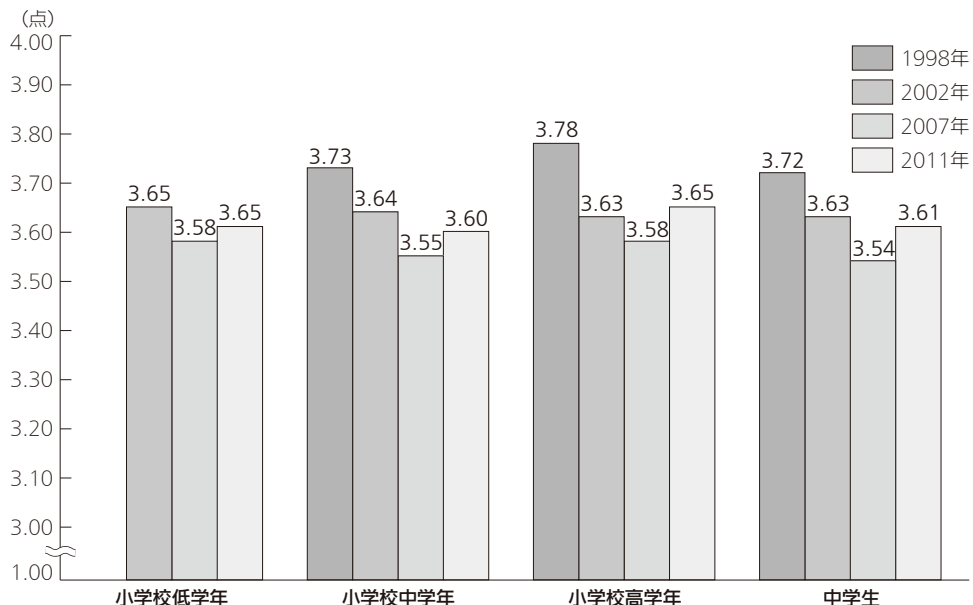
注1) 「よくある」の%。  
注2) ( ) 内はサンプル数。

図3-1-3 子育ての場面 子育て場面での意識（学年段階別）



注1) 「よくある」の%。  
注2) ( ) 内はサンプル数。

図3-1-4 子どもが成長したと感じる 平均値（経年比較 学年段階別）

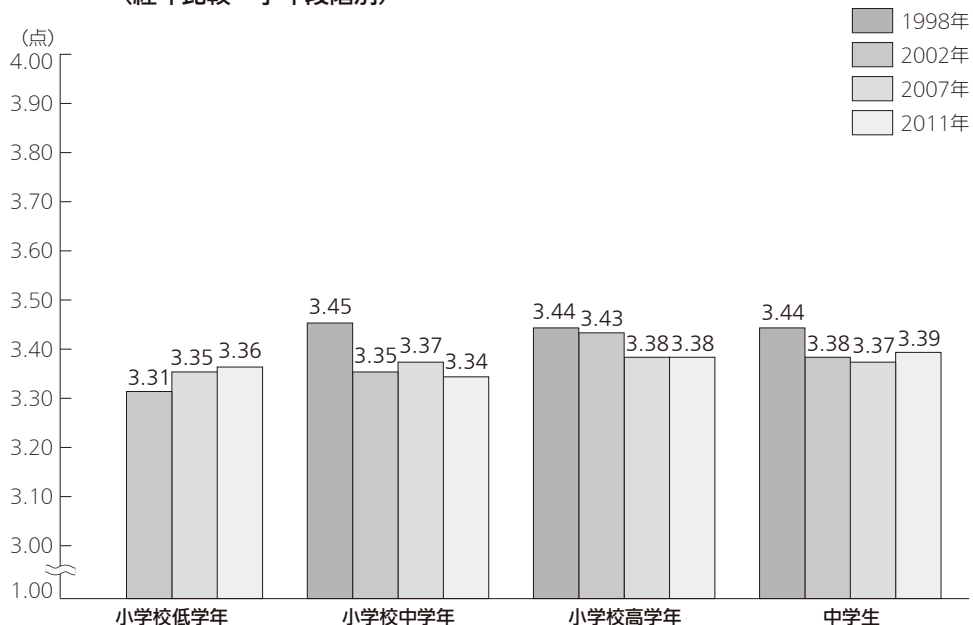


注1) 平均値は「よくある」を4点、「時々ある」を3点、「あまりない」を2点、「ぜんぜんない」を1点として無回答・不明を除いて算出した。

注2) 1998年は小学校低学年の母親は調査対象に含めていない。

注3) サンプル数は、1998年（小学校中学年 1,002人、小学校高学年 1,128人、中学生 2,328人）、2002年（小学校低学年 1,187人、小学校中学年 1,185人、小学校高学年 1,207人、中学生 2,504人）、2007年（小学校低学年 1,437人、小学校中学年 1,239人、小学校高学年 949人、中学生 3,127人）、2011年（小学校低学年 1,357人、小学校中学年 1,440人、小学校高学年 1,394人、中学生 3,186人）。

図3-1-5 子どもをもつことによって自分自身が成長したと感じる 平均値（経年比較 学年段階別）

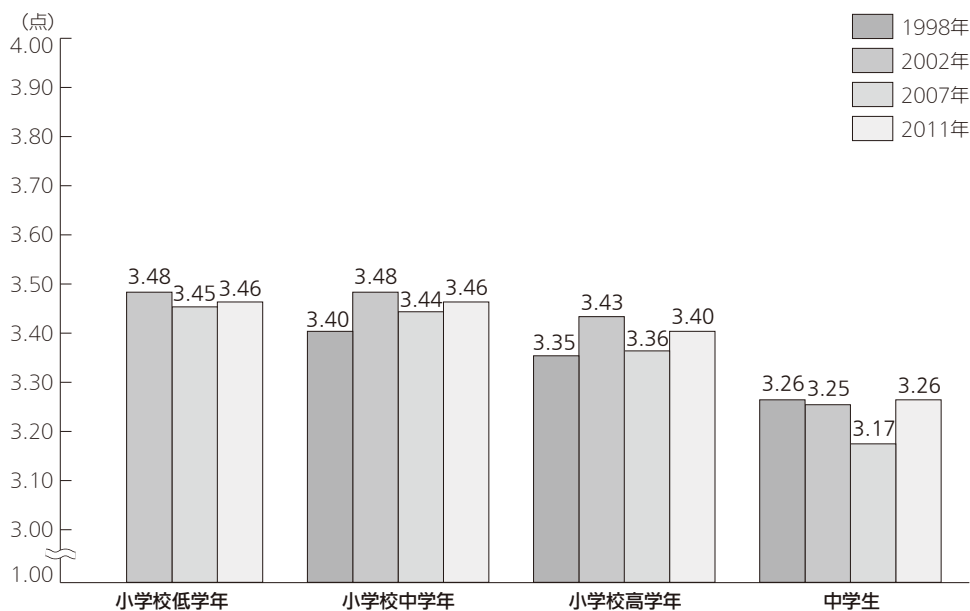


注1) 平均値は「よくある」を4点、「時々ある」を3点、「あまりない」を2点、「ぜんぜんない」を1点として無回答・不明を除いて算出した。

注2) 1998年は小学校低学年の母親は調査対象に含めていない。

注3) サンプル数は、1998年（小学校中学年 1,002人、小学校高学年 1,128人、中学生 2,328人）、2002年（小学校低学年 1,187人、小学校中学年 1,185人、小学校高学年 1,207人、中学生 2,504人）、2007年（小学校低学年 1,437人、小学校中学年 1,239人、小学校高学年 949人、中学生 3,127人）、2011年（小学校低学年 1,357人、小学校中学年 1,440人、小学校高学年 1,394人、中学生 3,186人）。

図3-1-6 子どもが親に対して思いやりのある言葉や態度を示してくれたと感じる 平均値  
(経年比較 学年段階別)



注1) 平均値は「よくある」を4点、「時々ある」を3点、「あまりない」を2点、「ぜんぜんない」を1点として無回答・不明を除いて算出した。

注2) 1998年は小学校低学年の母親は調査対象に含めていない。

注3) サンプル数は、1998年(小学校中学年1,002人、小学校高学年1,128人、中学生2,328人)、2002年(小学校低学年1,187人、小学校中学年1,185人、小学校高学年1,207人、中学生2,504人)、2007年(小学校低学年1,437人、小学校中学年1,239人、小学校高学年949人、中学生3,127人)、2011年(小学校低学年1,357人、小学校中学年1,440人、小学校高学年1,394人、中学生3,186人)。



## 第2節 子育てで心がけていること

あいさつやお礼ができること、そして対人関係を大切にしようとするしつけが重視されている。自立心育成のしつけも学年差なく重視されている。が、手伝う家事を決めている母親は多くなく、経年推移では緩やかに上昇してはいるが大きい変化がない。

「お子様を育てていくうえで次のようなことをどの程度心がけていますか」と、12項目についてたずねた。このうち新設の項目は一つ、「パソコンの使い方についてルールを決めている」である。小1生から中3生全体の結果を図3-2-1①・②に示した。「とても心がけている」の多い順に並べてあるが、上位3つの順番は前回と全く同じであった。

### 1. 対人関係の重視

「あいさつやお礼ができるようにしつけている」は今回もトップである。次いで「友だちづきあいは大切にできるように教えている」が続く。4位の「目上の人・先生・高齢者などへの言葉づかいを教えている」も加わると、対人関係のしつけを重視する考え方が伝わってくる。前節の子育て場面の質問で、「子どもと成績や勉強について話をする」という回答が低学年にまで及んでいて、家庭教育が勉強・成績中心にかたよっているかにみえたが、他方ではこのように基本的な人間関係や生活習慣も重視しながらしつけをしている母親のようすが伝わってくる。

対人関係のしつけのうち、「あいさつやお礼ができるようにしつけている」は、学年が上になっていくにつれて減少していく(図3-2-2)。とはいえ、中3生でも64.5%の母親が「とても心がけている」と答えて

いることから、いかに多くの母親から大切にされているしつけであるかということがわかる。

一方、学年差がなく、どの学年の子どもにも伝えられている対人関係のしつけ項目もある。それは「友だちづきあいは大切にできるように教えている」と「目上の人・先生・高齢者への言葉づかいを教えている」である。これらは小学校低学年から中3生にいたるまで高率で推移している。しかも経年変化がなくずっと高い比率を保っている。

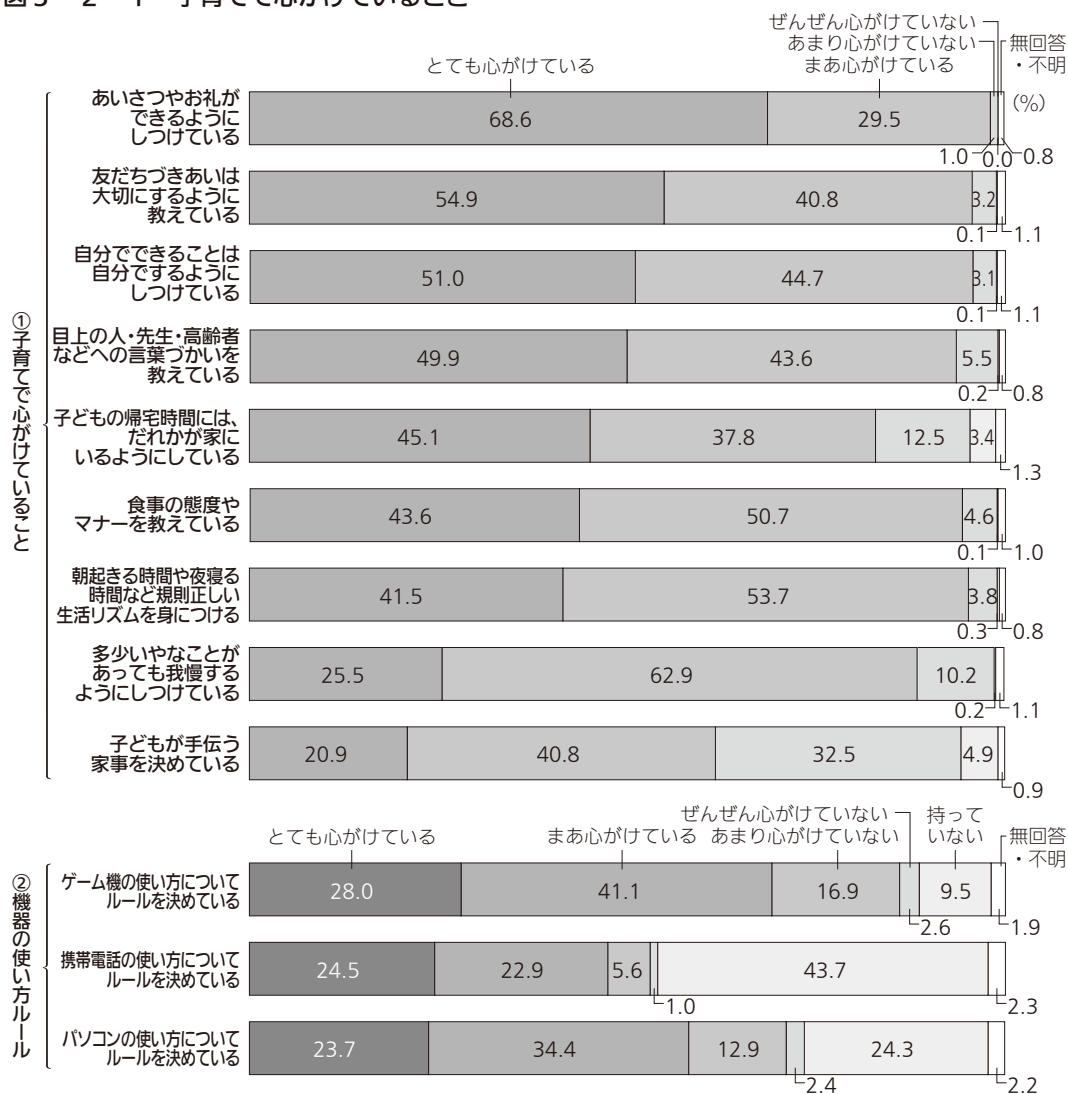
### 2. 自立心を育てるしつけ

同じく高率を保ち、しかも学年による差が小さいのは「自分でできることは自分でするようにしつけている」である。これは自立心を育てる最初のしつけと考えられるが、「自立心の育成」は改正教育基本法第十条に家庭教育に必要なこととして書かれたことでもある。51.0%が「とても心がけている」と回答し、「まあ心がけている」を合わせると95.7%がこのしつけをするよう心がけていることになる(図3-2-1①)。経年比較が図3-2-7に示してあるが、前回、熱心さが低下していた小学校中学年、高学年、中学生においても今回はやや盛り返している。

さて、この「自分でできることは自分でするようにしつけている」は他のしつけ項目と相関があるが、とくに強い関連を示す



図3-2-1 子育てで心がけていること



注) サンプル数は7,519人。

のは「あいさつやお礼ができるようにしつけている」「目上の人・先生・高齢者などへの言葉づかいを教えている」「朝起きる時間や夜寝る時間など規則正しい生活リズムを身につける」、そして「子どもが手伝う家事を決めている」となっている。この「子どもが手伝う家事を決めている」もまた自立のためになるしつけと考えられるが、たしかにこの2項目は相関がみられる。「子どもが手伝う家事を決めている」母親は決して多くない。「とても心がけている」は20.9%である(図3-2-1)。しかし「自分でできることは自分でするようにしつけている」を「とても心がけている」母親の32.5%が「子どもが手伝う家事を決めている」ことを「とても心がけている」と答えている。かなり高率である。

自立心育成につながる「子どもが手伝う家事を決めている」は、母親の就業状況との関連がみられた。「とても心がけている」+「まあ心がけている」と回答した母親は専業主婦59.9%、パートやフリー61.6%、常勤65.0%と働く母親が手伝いをさせている(統計的に有意差あり)。経年の推移をみると緩やかに増加傾向がみられるものの大きい変化はない。

.....  
**3. ゲーム機・携帯電話・パソコン**  
.....

2007年の新設項目、ゲーム機と携帯電話に加えて今回2011年は「パソコンの使い方についてルールを決めている」を加えた。全体の結果は図3-2-1②にあるとおりである。ゲーム機、携帯電話について前回からの増減はない。

これらの機器を持っている比率は学年によって異なるので、それも含めたデータを図3-2-3~5に示した。まず携帯電話については小学校低学年の71.3%が持っていない。しかし持っているケースだけにつ

いてみると(「持っていない」「無回答・不明」のケースを分母から除外して比率を算出、以下同)、低学年では58.6%の母親がルールを決めるしつけを「とても心がけている」と答え、中3生の母親でも37.9%が「とても心がけている」と回答している。

ゲーム機は多くの子どもたちが持っている機器である。図3-2-4にみるように、持っていない子どもの比率は小学校低学年で22.5%、中3生では6.4%となる。持っている子どもについて使い方のルールを決めているかどうかをみると、「とても心がけている」の比率は小学校低学年から順に39.7%、中学年41.2%、高学年32.5%、中1生25.7%、中2生23.8%、中3生22.9%であった。低学年・中学年の母親はしっかりしつけているようすが高学年以降は次第に緩めていくようである。

パソコンはどうであろうか。持っていない比率は低学年の51.0%から中3生の7.1%へと推移する(図3-2-5)。持っている子どもだけにしぼってみると、しつけを「とても心がけている」母親は低学年36.6%、中学年36.9%、高学年32.2%、中1生31.6%、中2生28.1%、中3生28.8%となっている。学年差は予想よりも小さいといえるのではないだろうか。母親たちの熱心なしつけぶりが伝わってくるようである。

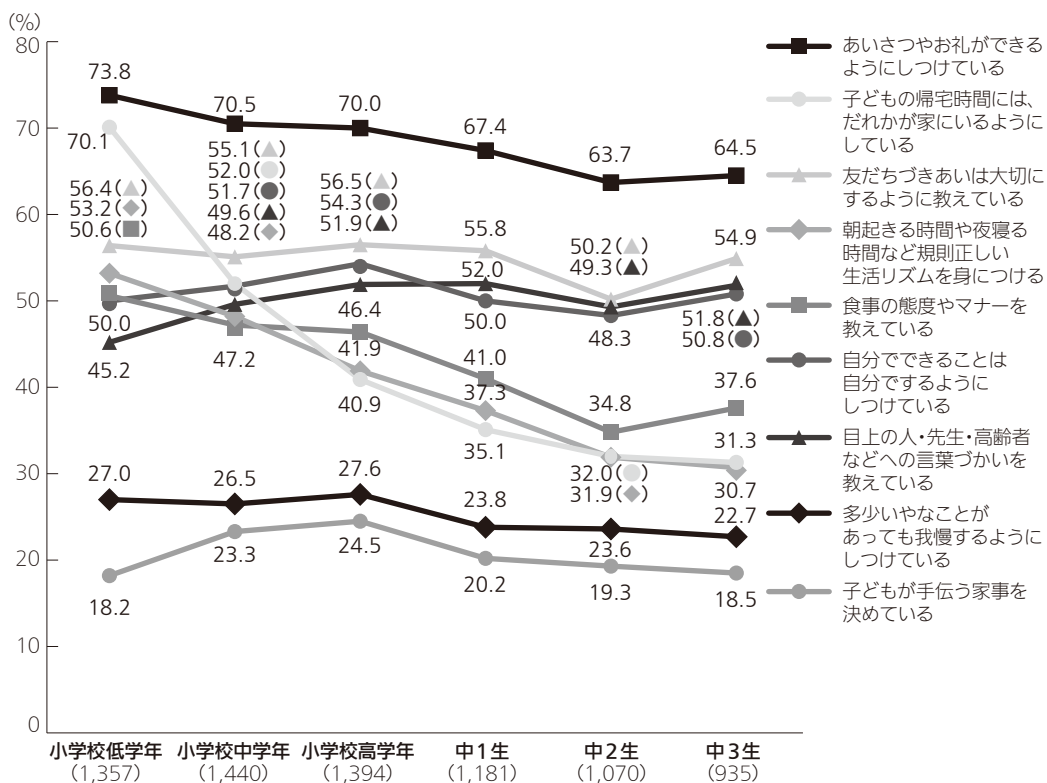
.....  
**4. 経年変化**  
.....

前回2007年に注目された項目について確認してみた(図3-2-6~8)。数値が高いほどしつけの熱心さを示すように算出した平均値である。「食事の態度やマナーを教えている」「自分でできることは自分でするようにしつけている」をみると、小学校高学年、中学生の母親の平均値が好転している。しかし注目されるのは「多少いやな

ことがあっても我慢するようにつけている」である。どの学年段階でも熱心さが低

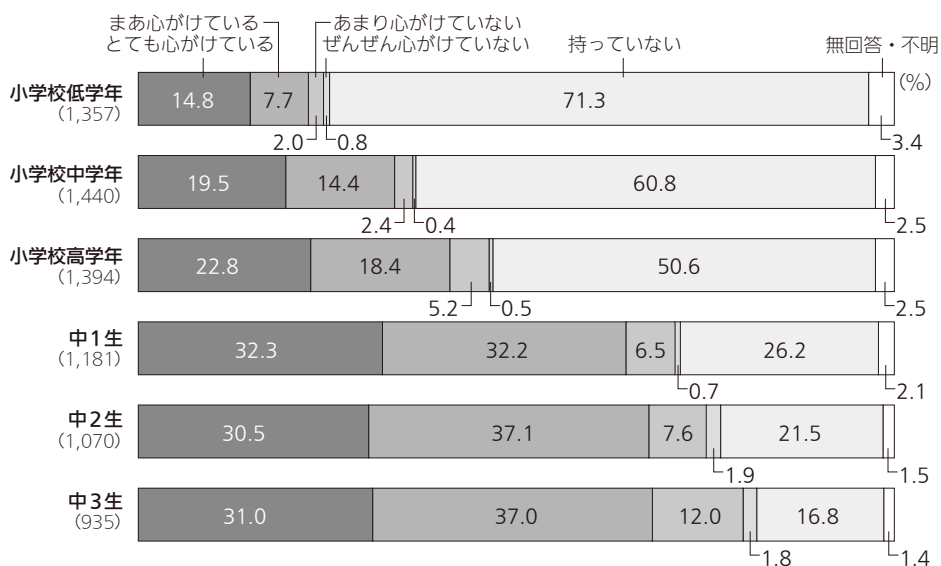
下した。我慢のしつけの変化が注目される。

図3-2-2 子育てで心がけていること（学年段階別）



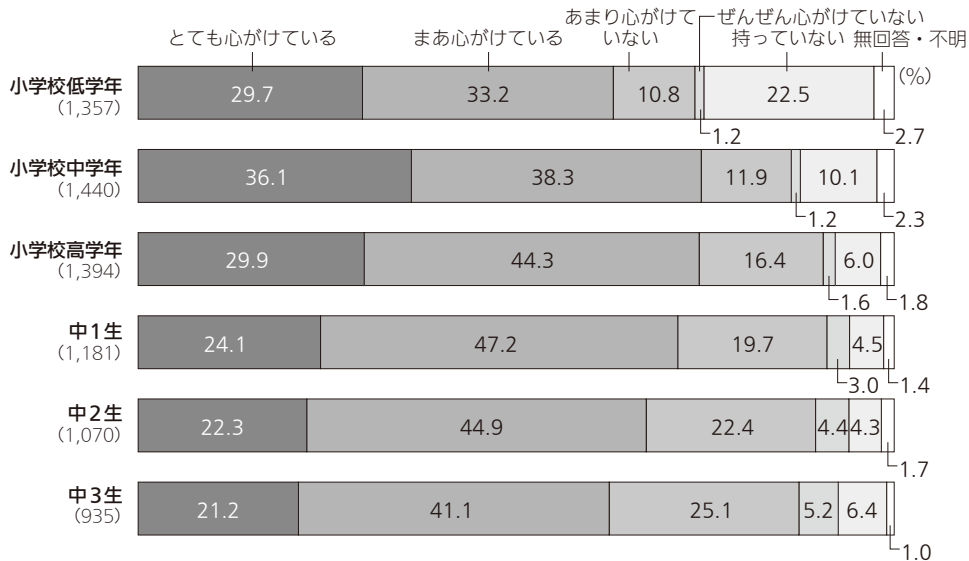
注1) 「とても心がけている」の%。  
注2) ( ) 内はサンプル数。

図3-2-3 携帯電話の使い方についてルールを決めている（学年段階別）



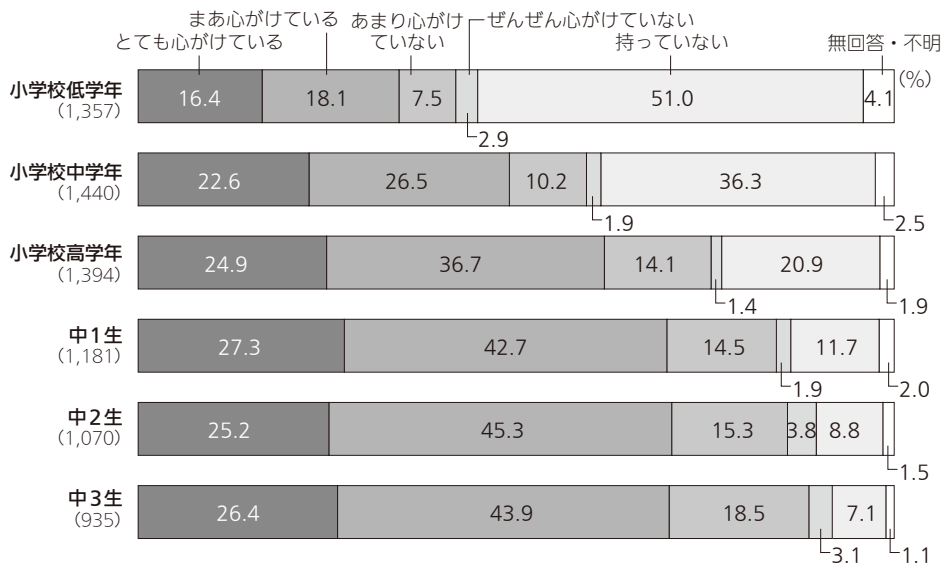
注) ( ) 内はサンプル数。

図3-2-4 ゲーム機の使い方についてルールを決めている（学年段階別）



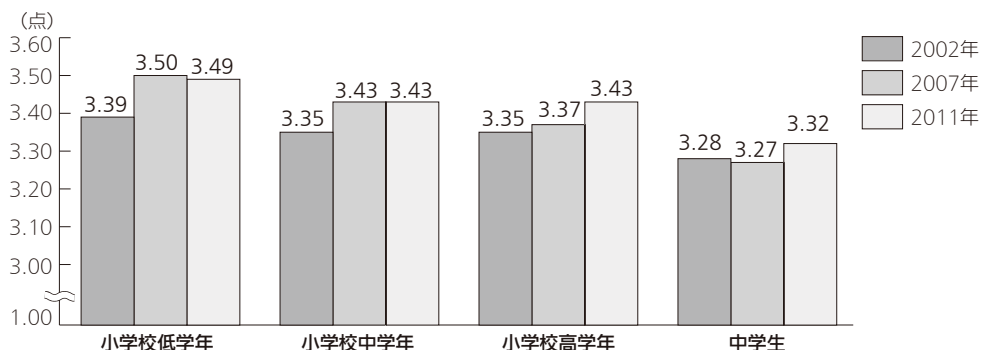
注（ ）内はサンプル数。

図3-2-5 パソコンの使い方についてルールを決めている（学年段階別）



注（ ）内はサンプル数。

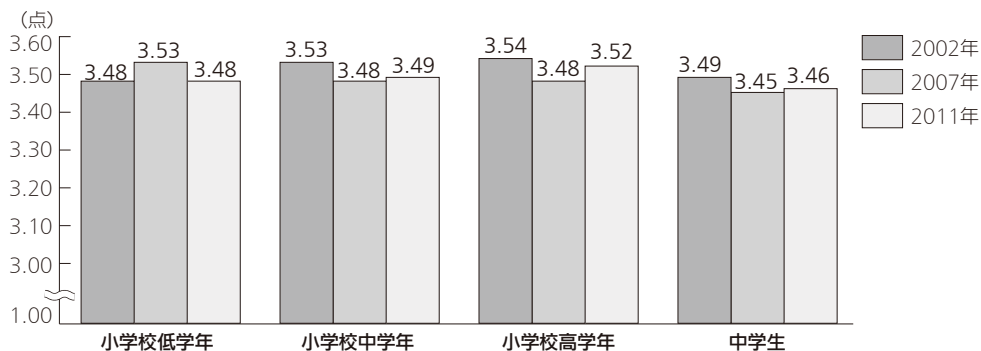
図3-2-6 食事の態度やマナーを教えている 平均値（経年比較 学年段階別）



注1) 平均値は「とても心がけている」を4点、「まあ心がけている」を3点、「あまり心がけていない」を2点、「ぜんぜん心がけていない」を1点として無回答・不明を除いて算出した。

注2) サンプル数は、2002年（小学校低学年1,187人、小学校中学年1,185人、小学校高学年1,207人、中学生2,504人）、2007年（小学校低学年1,437人、小学校中学年1,239人、小学校高学年949人、中学生3,127人）、2011年（小学校低学年1,357人、小学校中学年1,440人、小学校高学年1,394人、中学生3,186人）。

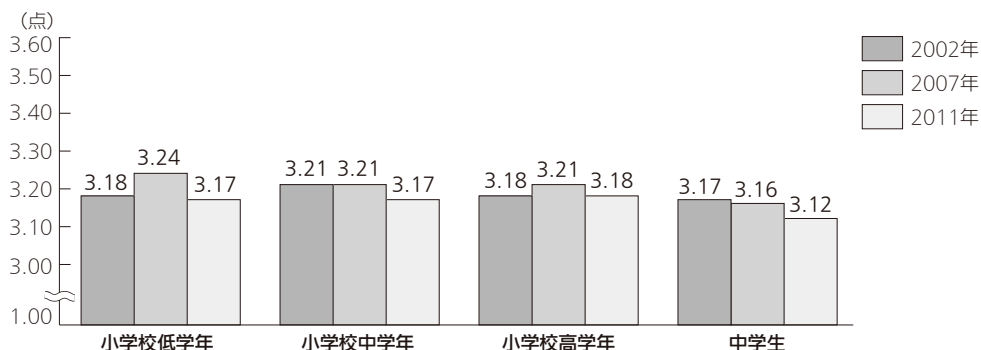
図3-2-7 自分でできることは自分でするようにしている 平均値（経年比較 学年段階別）



注1) 平均値は「とても心がけている」を4点、「まあ心がけている」を3点、「あまり心がけていない」を2点、「ぜんぜん心がけていない」を1点として無回答・不明を除いて算出した。

注2) サンプル数は、2002年（小学校低学年1,187人、小学校中学年1,185人、小学校高学年1,207人、中学生2,504人）、2007年（小学校低学年1,437人、小学校中学年1,239人、小学校高学年949人、中学生3,127人）、2011年（小学校低学年1,357人、小学校中学年1,440人、小学校高学年1,394人、中学生3,186人）。

図3-2-8 多少いやなことがあっても我慢するようになっている 平均値（経年比較 学年段階別）



注1) 平均値は「とても心がけている」を4点、「まあ心がけている」を3点、「あまり心がけていない」を2点、「ぜんぜん心がけていない」を1点として無回答・不明を除いて算出した。

注2) サンプル数は、2002年（小学校低学年1,187人、小学校中学年1,185人、小学校高学年1,207人、中学生2,504人）、2007年（小学校低学年1,437人、小学校中学年1,239人、小学校高学年949人、中学生3,127人）、2011年（小学校低学年1,357人、小学校中学年1,440人、小学校高学年1,394人、中学生3,186人）。

## 第3節 家庭の教育方針

前回 2007 年まで少なくなってきた「子どものしつけや教育については夫婦で考えている」が今回も減少した。子どもへの対応が夫婦でくい違うおそれもあり要注目である。将来を見据えて進学を考える母親は低学年にも広がっている。

### 1. 変わらない多数派のしつけ

「お子様のしつけや教育について、次のようなことがどのくらいあてはまりますか」と質問し、12 項目についてたずねた。「とてもあてはまる」から「ぜんぜんあてはまらない」の 4 件法である。「とてもあてはまる」の多い順に図 3-3-1 に示した。このうち今回 2011 年に新設した項目は、「子どもを一人の人間として認め、接している」「子どもには厳しいしつけや教育も必要だと思う」「夫婦で子どもへの対応がくい違うことがある」「子どもが大人になって一人立ちできるか不安である」の 4 項目である。

新設以外の項目については前回と順位はほとんど変わらなかった。上位に登場したのは今回も「子どもがどういう友だちとつきあっているかを知るようにしている」であった。93.8%が「とてもあてはまる」+「まああてはまる」と回答している。この数字が 80%を超えるのは、「子どもを一人の人間として認め、接している」(90.4%) および「子どもには厳しいしつけや教育も必要だと思う」(85.2%) という今回新設の項目であった。

### 2. 子どもの成長としつけの変化

上位になった「子どもがどういう友だちとつきあっているかを知るようにしている」と「子どもを一人の人間として認め、接し

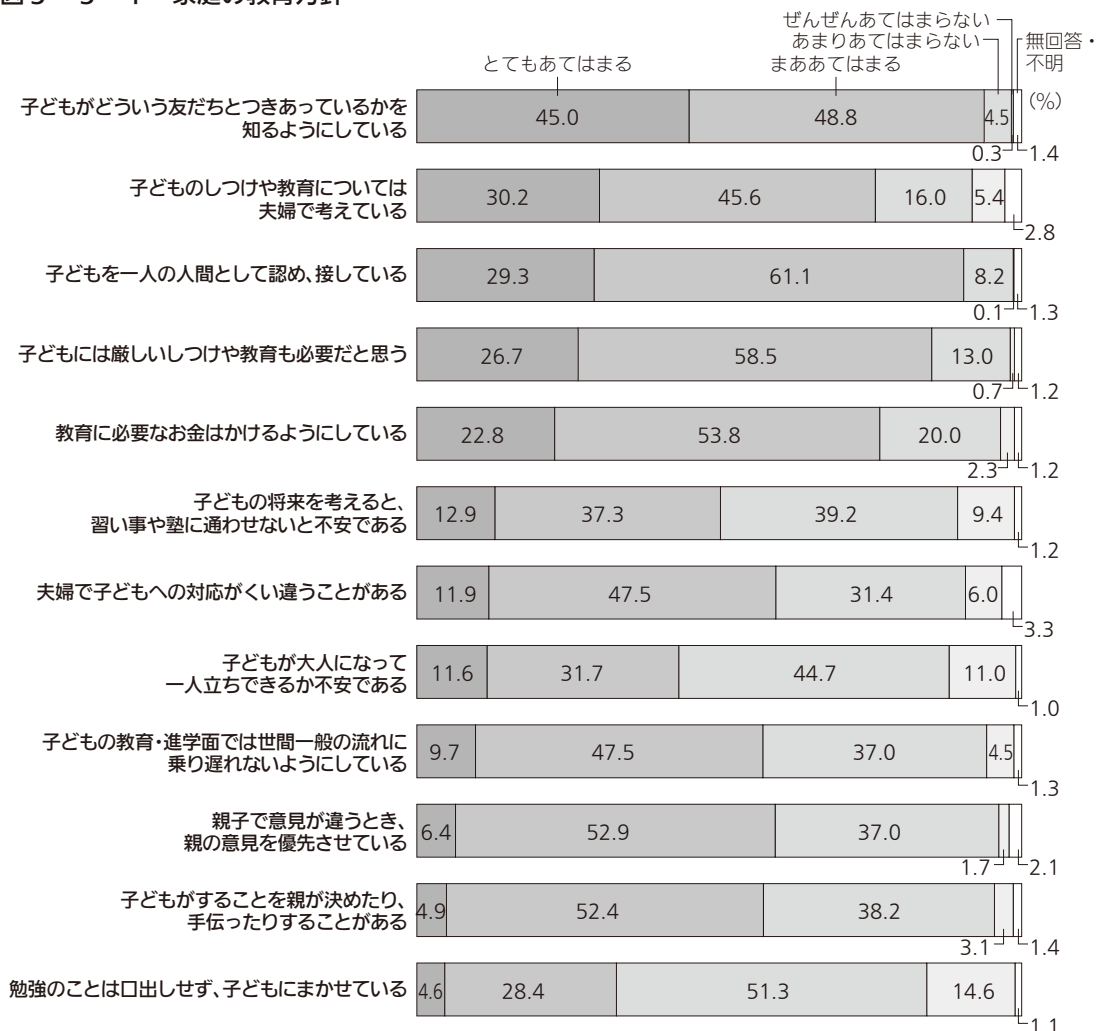
ている」は、ともに学年進行による変化がややみられるしつけである(図 3-3-2)。この図は学年差のある項目の平均値を図示したものである。「とてもあてはまる」4 点～「ぜんぜんあてはまらない」1 点として算出した数値を折れ線グラフにした。

小学生に対しては子どもの友だちを把握しようとする母親も、中学生になれば少しずつ目を離すようになり、「子どもを一人の人間として認め、接している」ようになっていくようすがよくあらわれている。

より明確に学年差があるしつけは次の 4 つであった。まず成長とともに減少していくのは、「親子で意見が違うとき、親の意見を優先させている」と「子どもがすることを親が決めたり、手伝ったりすることがある」の 2 つである。中学生になると子どもの意見を認め尊重するようになることが、そして親が先回りして手伝ったりすることも少なくなることが示されている。

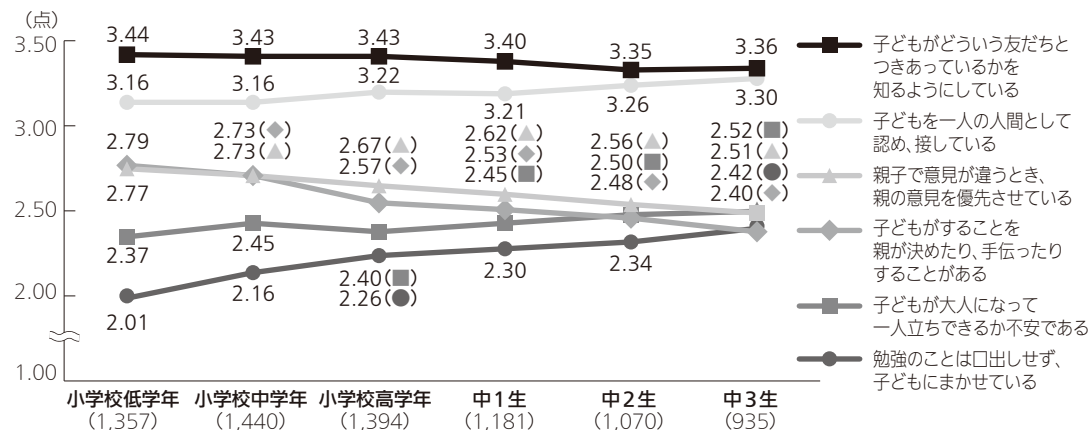
反対に増えていくのは、「勉強のことは口出しせず、子どもにまかせている」であった。小学校高学年へ、そして中学生へと大きくなるにつれてあまり口出ししなくなるようすがみえてくる。もう一つ、増え方は小さいが気になるのは新設の項目で、「子どもが大人になって一人立ちできるか不安である」という内容のものである。一人立ちできるか、という心配は中学生になってもなお、いや中学生になったからなおさらということなのか、一人立ちへの不安がかきたてら

図3-3-1 家庭の教育方針



注) サンプル数は7,519人。

図3-3-2 家庭の教育方針 平均値 (学年段階別)



注1) 平均値は「とてもあてはまる」を4点、「まああてはまる」を3点、「あまりあてはまらない」を2点、「ぜんぜんあてはまらない」を1点として無回答・不明を除いて算出した。

注2) 12項目中6項目を图示した。

注3) ( ) 内はサンプル数。



れる、というしつけの悩みがあることが今回明らかになった。今後も注目したい項目である。

### 3. 経年変化①

注目される経年変化についてみてみよう。「子どものしつけや教育については夫婦で考えている」は、前回までも減少してきていたが、今回も減少した（図3-3-3）。とくに小学校高学年と中学生の母親で減少が目立つ。今回新設の「夫婦で子どもへの対応がくい違うことがある」という項目があるが、これとの相関が注目される。すなわち子どものしつけや教育を夫婦で考えている母親ほど、夫婦で子どもへの対応がくい違わないのである。とすると、夫婦でしつけを考えている母親の減少は大いに気になる傾向といえそうである。

もうひとつ気になる変化は、「子どもがすることを親が決めたり、手伝ったりすることがある」が、小学校低学年、中学年でやや増えて、いわば「高止まり」となっていることである（図3-3-4）。さらに「勉強のことは口出しせず、子どもにまかせている」が減少傾向にあることである（図3-3-5）。いずれも親が子どもを自立させるよりは面倒を見過ぎる度合いがふえている、という傾向がみえることになる。それはもう一つの経年変化とも無関係ではないのかもしれない。

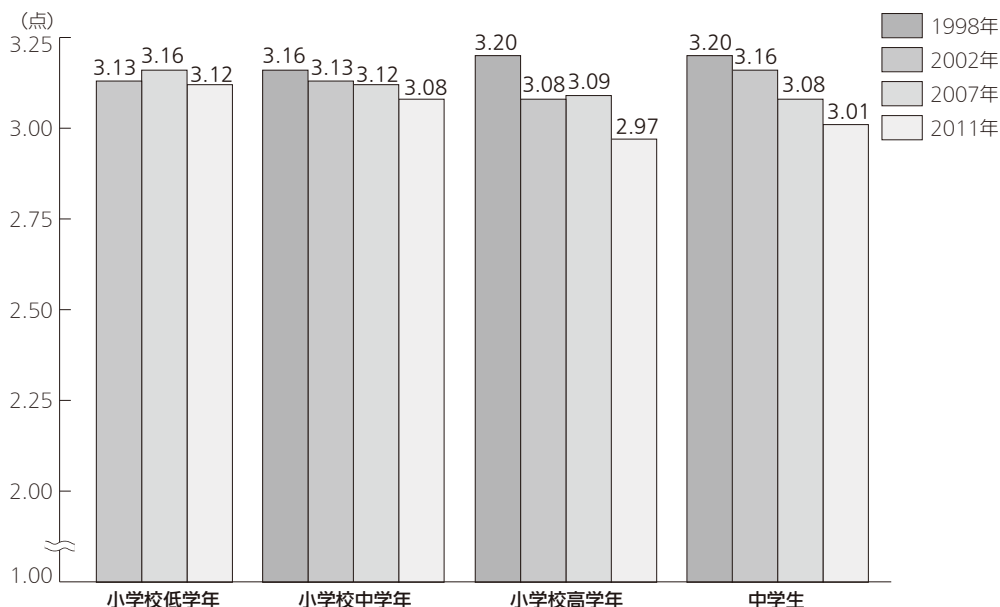
### 4. 経年変化②

それは成績や進学に関する家庭の方針である。図3-3-6～8は平均値を学年段階別に経年比較したグラフである。子育ての場面の質問において、成績や勉強の話をするのが小学校低学年にまで広がっていることがわかったが、それと関連するのがこの3つの教育方針である。まず、「教育に必要なお金はかけるようにしている」は小学校低学年、中学年において2002年以降増えていたが、今回2011年も高い傾向が続いている（図3-3-6）。高学年も中学生も高止まり状態である。

「子どもの教育・進学面では世間一般の流れに乗り遅れないようにしている」も小学校低学年、中学年で上昇傾向が続いている（図3-3-7）。

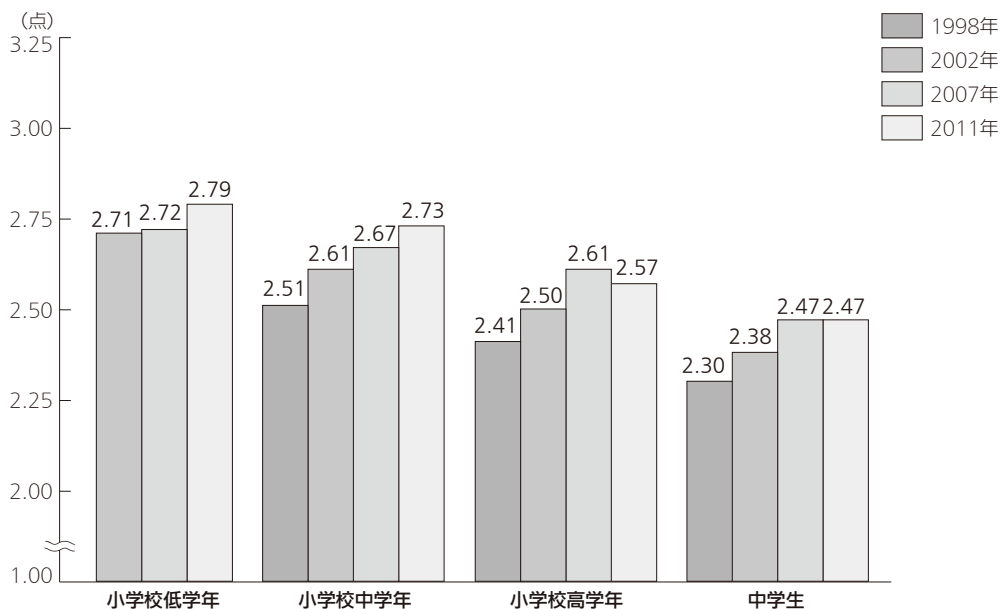
さらに「子どもの将来を考えると、習い事や塾に通わせないと不安である」も、低学年、中学年で着実な上昇傾向にある（図3-3-8）。これらの結果は、勉強、成績、進学に的をしぼる家庭教育方針をもつ家庭が増えたことを語っている。日本は教育費支出のうち保護者の負担分が多いことが知られている。子育て中の家族はその負担に耐え、よりよいしつけをしてよき将来をたぐりよせようと日々の子育てをしている姿がみえてくる。

図3-3-3 子どものしつけや教育については夫婦で考えている 平均値（経年比較 学年段階別）



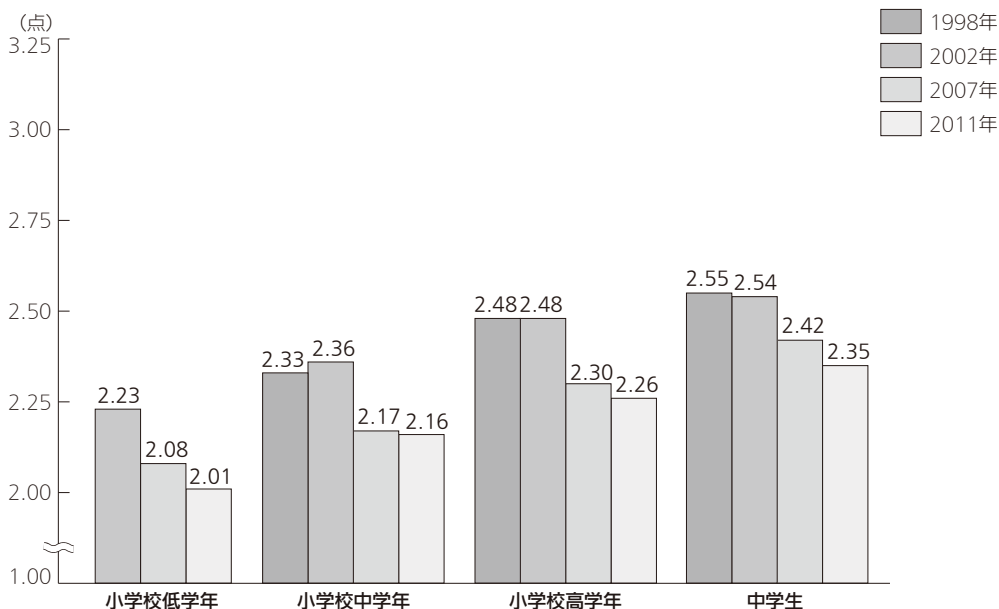
- 注1) 平均値は「とてもあてはまる」を4点、「まああてはまる」を3点、「あまりあてはまらない」を2点、「ぜんぜんあてはまらない」を1点として無回答・不明を除いて算出した。
- 注2) 1998年は小学校低学年の母親は調査対象に含めていない。
- 注3) サンプル数は、1998年（小学校中学年1,002人、小学校高学年1,128人、中学生2,328人）、2002年（小学校低学年1,187人、小学校中学年1,185人、小学校高学年1,207人、中学生2,504人）、2007年（小学校低学年1,437人、小学校中学年1,239人、小学校高学年949人、中学生3,127人）、2011年（小学校低学年1,357人、小学校中学年1,440人、小学校高学年1,394人、中学生3,186人）。

図3-3-4 子どもがすることを親が決めたり、手伝ったりすることがある 平均値（経年比較 学年段階別）



- 注1) 平均値は「とてもあてはまる」を4点、「まああてはまる」を3点、「あまりあてはまらない」を2点、「ぜんぜんあてはまらない」を1点として無回答・不明を除いて算出した。
- 注2) 1998年は小学校低学年の母親は調査対象に含めていない。
- 注3) サンプル数は、1998年（小学校中学年1,002人、小学校高学年1,128人、中学生2,328人）、2002年（小学校低学年1,187人、小学校中学年1,185人、小学校高学年1,207人、中学生2,504人）、2007年（小学校低学年1,437人、小学校中学年1,239人、小学校高学年949人、中学生3,127人）、2011年（小学校低学年1,357人、小学校中学年1,440人、小学校高学年1,394人、中学生3,186人）。

図3-3-5 勉強のことは口出しせず、子どもにまかせている 平均値  
(経年比較 学年段階別)

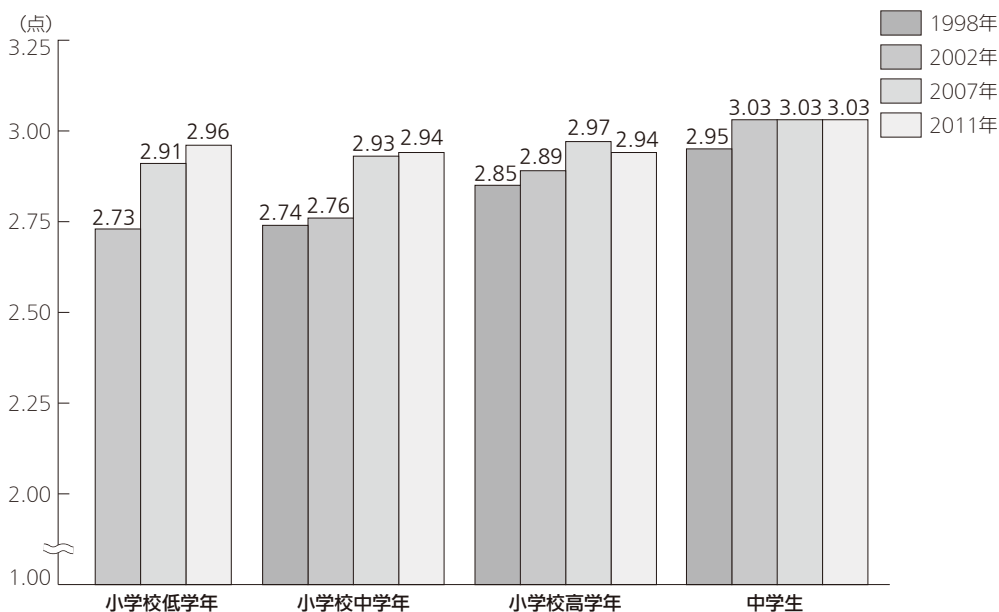


注1) 平均値は「とてもあてはまる」を4点、「まああてはまる」を3点、「あまりあてはまらない」を2点、「ぜんぜんあてはまらない」を1点として無回答・不明を除いて算出した。

注2) 1998年は小学校低学年の母親は調査対象に含めていない。

注3) サンプル数は、1998年(小学校中学年1,002人、小学校高学年1,128人、中学生2,328人)、2002年(小学校低学年1,187人、小学校中学年1,185人、小学校高学年1,207人、中学生2,504人)、2007年(小学校低学年1,437人、小学校中学年1,239人、小学校高学年949人、中学生3,127人)、2011年(小学校低学年1,357人、小学校中学年1,440人、小学校高学年1,394人、中学生3,186人)。

図3-3-6 教育に必要なお金はかけるようにしている 平均値 (経年比較 学年段階別)

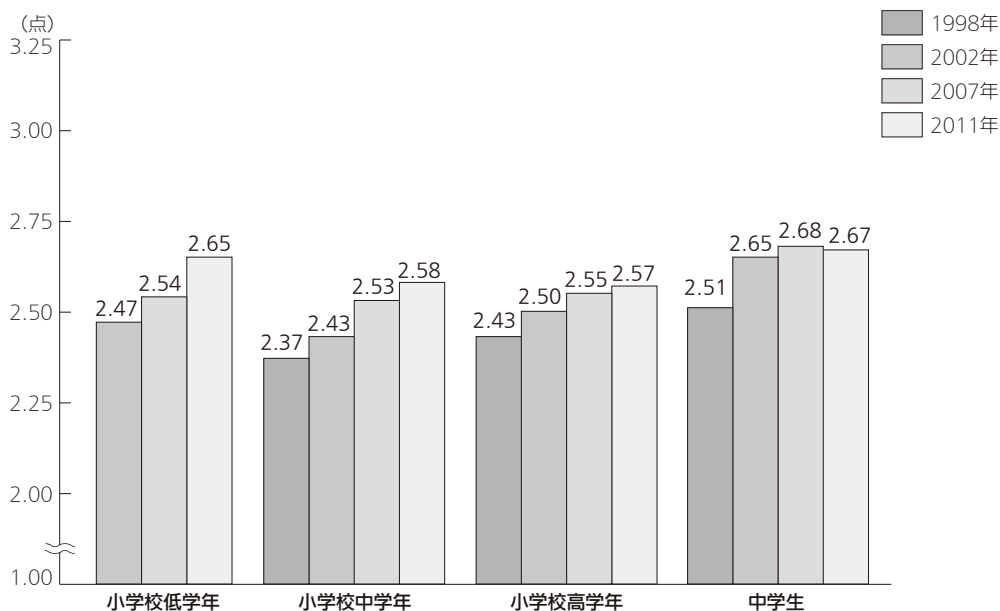


注1) 平均値は「とてもあてはまる」を4点、「まああてはまる」を3点、「あまりあてはまらない」を2点、「ぜんぜんあてはまらない」を1点として無回答・不明を除いて算出した。

注2) 1998年は小学校低学年の母親は調査対象に含めていない。

注3) サンプル数は、1998年(小学校中学年1,002人、小学校高学年1,128人、中学生2,328人)、2002年(小学校低学年1,187人、小学校中学年1,185人、小学校高学年1,207人、中学生2,504人)、2007年(小学校低学年1,437人、小学校中学年1,239人、小学校高学年949人、中学生3,127人)、2011年(小学校低学年1,357人、小学校中学年1,440人、小学校高学年1,394人、中学生3,186人)。

図3-3-7 子どもの教育・進学面では世間一般の流れに乗り遅れないようにしている  
 平均値（経年比較 学年段階別）

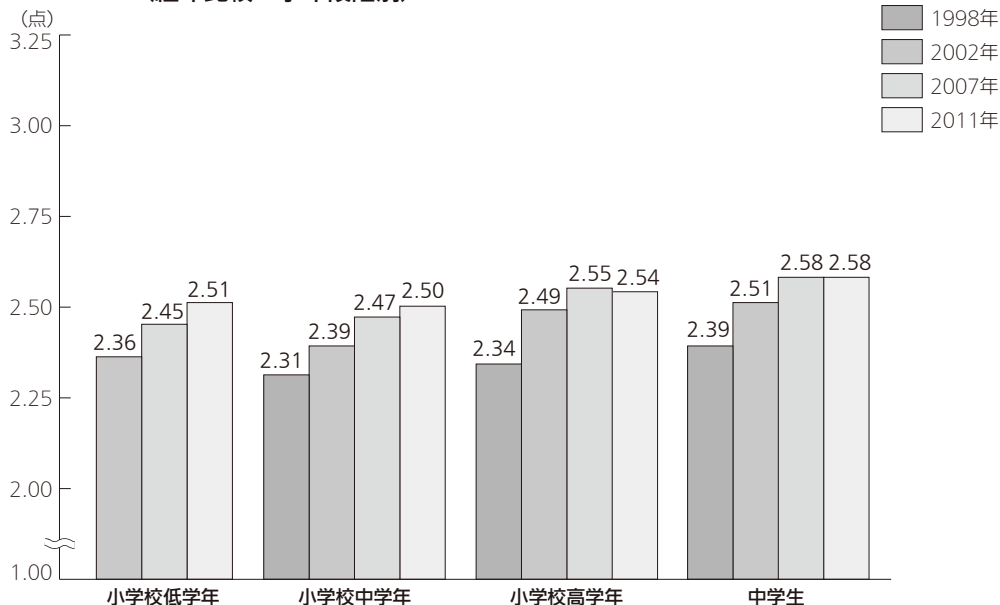


注1) 平均値は「とてもあてはまる」を4点、「まああてはまる」を3点、「あまりあてはまらない」を2点、「ぜんぜんあてはまらない」を1点として無回答・不明を除いて算出した。

注2) 1998年は小学校低学年の母親は調査対象に含めていない。

注3) サンプル数は、1998年（小学校中学年1,002人、小学校高学年1,128人、中学生2,328人）、2002年（小学校低学年1,187人、小学校中学年1,185人、小学校高学年1,207人、中学生2,504人）、2007年（小学校低学年1,437人、小学校中学年1,239人、小学校高学年949人、中学生3,127人）、2011年（小学校低学年1,357人、小学校中学年1,440人、小学校高学年1,394人、中学生3,186人）。

図3-3-8 子どもの将来を考えると、習い事や塾に通わせないと不安である 平均値  
 （経年比較 学年段階別）



注1) 平均値は「とてもあてはまる」を4点、「まああてはまる」を3点、「あまりあてはまらない」を2点、「ぜんぜんあてはまらない」を1点として無回答・不明を除いて算出した。

注2) 1998年は小学校低学年の母親は調査対象に含めていない。

注3) サンプル数は、1998年（小学校中学年1,002人、小学校高学年1,128人、中学生2,328人）、2002年（小学校低学年1,187人、小学校中学年1,185人、小学校高学年1,207人、中学生2,504人）、2007年（小学校低学年1,437人、小学校中学年1,239人、小学校高学年949人、中学生3,127人）、2011年（小学校低学年1,357人、小学校中学年1,440人、小学校高学年1,394人、中学生3,186人）。